

第一章…硝煙と静寂の、その先で

「……状況を確認。周囲に敵対勢力の気配なし。……よし、侵入成功。お疲れ様、先生」

深い山々に囲まれた、静かな温泉街。ひなびた風情の老舗旅館『翠明館』の入り口で、アズサは鋭い視線を周囲に走らせながら、俺の隣で小さく頷いた。

トリニティ総合学園、補習授業部の一員である白洲アズサ。謎の転校生として現れた彼女は、かつて在籍していた場所の影響なのか、常に周囲を警戒する軍人氣質などところがある。そんな彼女が、今日はいつものタクティカルベストや銃を置き、大きなトラベルバッグを一つ抱えて俺の隣に立っている。

「アズサ、ここは戦場じゃないから、そんなに身構えなくていいんだよ。今日は、勉強を頑張ったアズサへのご褒美なんだから」

「……あ。……ああ、そうだった。悪い、先生。つい、いつもの癖で……。休息もまた、次なる作戦のための重要なプロセスだと、ハナコも言っていた気がする。……ここが、温泉という場所か。初めて来るが……非常に静かだな。潜伏には向いているが、それ以上に、な

んだか……落ち着かない」

少しだけ不安そうに、アズサが俺の袖を掴んだ。

普段はガスマスクを被って籠城戦を仕掛けるような過激な一面もある彼女だが、こうして見ると、ただの年相応な少女にしか見えない。特に、最近の補習授業部の仲間たちとの交流や、俺の特別授業を通じて、少しずつ柔らかい表情を見せるようになってきていた。

先日の試験で見せた「不合格だけど紙一重だった」という天然発言には流石にズッコケたが、その後の猛勉強で、彼女の成績は飛躍的に向上した。そのお祝いに、「どこか行きたい場所はあるか？」と聞いたとき、彼女が迷いながらも口にしたのが「静かで、先生とゆっくり話せる場所」……それが、この温泉旅行だった。

旅館の女将さんに案内され、通されたのは奥まった場所にある離れの一室。

畳の香りが漂う純和風の空間に、アズサは目を丸くした。

「畳……。足音が吸収される、優れた素材だな。……先生、この部屋の死角はあそここの床の間と、この押し入れの中か？ 何かあったら私が確保する」

「アズサ、だから戦場じゃないって。ほら、まずは荷物を置いて。お茶でも飲もう」

苦笑いしながら彼女を促すと、アズサは「了解だ」と短く答え、座布団にちょこんと腰を下ろした。

だが、その姿勢はどこかぎこちない。背筋をピンと伸ばし、膝の上に拳を置くスタイルは、リラックスとは程遠いものだった。

俺はお茶を淹れ、彼女の前に差し出した。

「ほら、お茶。温かいうちにどうぞ」

「……感謝する、先生」

アズサは両手で湯呑みを持ち、ふーふーと息を吹きかけながら、少しずつお茶を啜る。

その様子を見てみると、なんだか小動物が一生懸命水分を補給しているみたいで微笑ましい。

ふと、彼女の視線が部屋の隅に置かれた小さな置物に釘付けになった。それは、この旅館の備品であろう、陶器で作られた可愛らしい猫の置物だった。

「……………つ。……先生、あの物体はなんだ。非常に……その、造形に無駄がないというか……………可愛い、な」

「ああ、招き猫だね。アズサ、こういうの好きだもんな」

「……………嫌いではない。……………というか、その、ヒフミが教えてくれた『モモフレンズ』のペロ口様にも通じる、高潔な精神を感じる……………ような気がする」

顔を少し赤らめながら、ボソボソと呟くアズサ。彼女のこういうギャップには、いつも驚かされる。ミリオタじみた物騒な言動の裏に隠された、乙女チックな本音。それが少しずつ表に出てくるようになったのは、彼女がこの世界、そして俺を信頼してくれている証拠なのかもしれない。

「さて、それじゃあ温泉に入る前に……………。まずは浴衣に着替えようか。アズサの分は、その籠に入ってるよ」

「ユカタ……………。伝統的な休息用装備、か。構造は単純そうだが、隙が多いな。これを着て戦闘になった場合、脚部の可動域が……………」

「戦わないから大丈夫だって。着方がわからなかったら教えるよ」

アズサは少し考えた後、「……先生に任せる。一人で着て、もし着崩れていたら……隙だらけの姿を晒すことになるからな」と真面目な顔で言った。

アズサは籠から浴衣を取り出し、少し緊張した面持ちで、洗面所へと向かった。

数分後。

「……先生。これで……合っているだろうか」

襖の向こうから、控えめな声が出た。

出てきたアズサの姿を見て、俺は一瞬、息を呑んだ。

紺色をベースにした落ち着いた柄の浴衣。いつも着ているタクティカルベストや制服とは違い、その薄い布地は彼女の柔らかな身体ラインを容赦なく浮き彫りにしていた。

特に、目を引いたのは彼女の胸元だった。

普段の制服姿ではそこまで意識していなかったが……浴衣の合わせの間から覗くその膨らみは、驚くほど豊かだった。

「アズサ……すごく似合ってるよ。綺麗だ」

「……そうか。……ならないが。だが、先生。この布……胸のあたりが、その、非常に……
圧迫感がある。帯を締めると、さらにこう……強調されてしまうような気がするのだが、こ
れは設計ミスではないのか？」

アズサは困惑したように、自分の胸元に手を当てた。

確かに、彼女の胸は標準的なサイズを大きく上回っている。浴衣の合わせが少し浮き気
味で、動くたびにその重みで生地が揺れるのが分かった。

彼女自身は、自分の身体がどれほど魅力的なのか、そしてその「装備」がどれほど破壊的
な威力を秘めているのか、全く自覚していない様子だった。

「……先生？ どうした。……私の顔に、何か付いているか？」

「いや……何でもない。ただ、本当に……。アズサは魅力的な女性なんだなって、改めて
思ったただだよ」

「……………っ！」



アズサの頬が、一気に真っ赤に染まった。

彼女は視線を泳がせ、浴衣の裾をぎゅっと掴んだ。

「……先生に、そんな風に言われると……。……なんだか、いつもより身体が熱い。……これが温泉の効果か？ まだ入ってもいいのに……。……」

「それは……。多分、温泉のせいじゃないと思うけど」

照れ隠しに、彼女は俺に背を向けて、窓の外を見つめた。

夕暮れ時の淡い光が、彼女のうなじを白く照らし出している。

普段の彼女からは想像もできないほど、しなやかで、女性らしいシルエット。

浴衣の帯によって強調された、細い腰。そして、その上にある、溢れんばかりの双丘。俺は思わず、彼女の方へと歩み寄っていた。

「アズサ……。帯、少し直そうか。少し緩んてるみたいだ」

「……。ああ……。助かる、先生。自分では、どうにも……。勝手にわからなくて」

アズサの背後に立ち、俺はその細い腰に手を回した。

びくん、と彼女の身体が震えるのが伝わってくる。

至近距離で感じる、彼女の体温。そして、石鹸のような、彼女特有の清潔な香り。

帯を締め直すために指が浴衣に触れるたび、その下にある肉体の柔らかさを想像してしまい、俺の鼓動も早まっていく。

「……先生の手、温かいな」

「……そうかな」

「……ああ。……なんだか、安心する。……先生とこうしていると、自分が戦わなくていい……ただの、アズサになれる気がするんだ」

アズサがぼつりと、独り言のように言った。

彼女が俺を呼ぶ声は、いつになく甘く、柔らかい。

普段の「先生」と呼ぶ時の敬意や義務感とは違う、もっと根源的な……親愛の情。

俺は帯を結び終え、そのまま彼女の肩をそっと抱き寄せた。



「アズサ。今日は、本当にゆっくりしていいんだよ。俺がずっと、隣にいるから」
「……約束、だぞ。……先生がそう言うなら……私は、自分を預ける。……全部、先生に」

アズサは俺の胸に、その豊かな胸を押し当てようとして寄りかかってきた。

柔らかく、圧倒的な質量。

浴衣越しても伝わってくる彼女の熱と、鼓動。

俺たちの夜は、まだ始まったばかりだった。

「……さあ、行こうか。温泉、冷めないうちに」

「……ああ。……一緒に行く。……先生」

アズサは俺の手を、指を絡めるようにしてぎゅっと握りしめた。

これから向かう大浴場、そしてその後待つ二人だけの時間。

静寂に包まれた旅館の中で、俺たちの距離は、かつてないほど近づこうとしていた。

第二章…湯煙に溶ける、秘められた鼓動

「……ここが、混浴という区域か。……視界が悪いな。湯気で前方が確認できない。……先生、離れないでくれ。逸れたら、合流に時間がかかる」

薄暗い脱衣所を抜け、立ち込める白濁とした湯気の向こう側へ。

アズサは俺の腕を強く掴んだまま、慎重に、まるで敵地に足を踏み入れる作業員のよう
な足取りで、岩造りの露天風呂へと近づいていく。

だが、その手は微かに震えていた。

貸し切りという名目ではあるが、二人きりで、こうしてほとんど裸に近い姿で並んでいるという事実には、彼女の心臓は激しく波打っているのが伝わってくる。

「……っ。……あつい、な。お湯の温度というより、その……。……先生、あまり見ないでほしい。……浴衣を脱いだら、なんだか、急に心細くなった」



巻いたバスタオル一枚。

それだけで隠しきれぬはずもない。

アズサの豊かな胸は、タオルの上端を押し上げ、今にも溢れ出さんばかりの圧倒的な存在感を主張していた。

白く、きめ細やかな肌。

寒さで少しだけ赤らんだ肩や鎖骨が、湯気に濡れて艶かしく光っている。

「……………ふう。……………はあ……………」

お湯に浸かると、アズサは小さく吐息を漏らし、そのまま身体を沈めた。

お湯の浮力で、彼女の胸がゆらりと浮き上がる。

タオルが濡れて肌に密着し、その輪郭がさらに鮮明になっていく。

「……………不思議な感覚だ。……………身体の内まで熱が浸透してくる。……………先生。……………近くに來てくれないか。……………さっきから鼓動がうるさくて……………止まらないんだ」



俺が隣に座ると、アズサは吸い寄せられるように身体を寄せてきた。

お湯の中で、彼女の太ももが俺の脚に触れる。

しっとりとした、吸い付くような肌の感触。

彼女は俺の肩に頭を預け、上目遣いでじっとこちらを見つめた。

潤んだ瞳、熱を帯びた吐息。

もう、そこに戦士の面影はない。

ただ、愛する人を求める一人の少女がいた。

「……先生。……あ。……んっ」

どちらからともなく、唇が重なった。

最初は、触れるだけの、確認するような軽いキス。

だが、アズサが小さく震えて、俺の首に腕を回した瞬間、それは深い、深い混濁へと変わっていく。

お互いの熱い吐息が混じり合い、口内を支配する熱に、アズサの身体が弓なりに反る。

「……………んう……………つ、ふあ……………、はあ……………つ、ん、ちゅ……………」

鼻にかかった甘い喘ぎ。

彼女の舌が、戸惑いながらも俺の舌に絡みつき、何度も、何度も、吸い上げるように求めてくる。

肺の中の空気が足りなくなるまで、俺たちは何度も口づけを繰り返した。

銀色の糸が、熱い湯気の中に消えていく。

「……………はあ、はあ……………つ。……………すごい、な。……………頭の中が、真っ白になる。……………先生に、溶かされていくみたいだ。……………ねえ、もつと……………もつと、触れてほしい。……………ここ、すごく……………苦しいんだ」

アズサが俺の手を引き、自分の胸へと導いた。

濡れたタオルの上からでもわかる、その驚くべき質量。

指先を沈めると、むにゅりと形を変える圧倒的な柔らかさと、その芯にある熱。



「……あつ！ ……あ、は……っ。……そこ、……先生……んんうっ！」

俺がその膨らみを手のひら全体で包み込み、ゆっくりと揉み解すと、アズサは喉を鳴らして俺にしがみついた。

タオルの結び目が解け、お湯の中にひらりと沈んでいく。

露わになったのは、期待通り、いや期待を遥かに超える、見事な双丘。

白磁のような美しさを持つそれは、俺の手から零れ落ちるほどに大きく、そして重い。

「……んああつ！ ……はあ、はあ……っ。……そんなに、強く……。……でも、気持ちいい。……先生の手が、熱い……。……あ、っ……。……そこ、……。……先、生……。……っ」

指先で、頂の突起を軽く摘み、転がす。

アズサは顔を真っ赤にし、俺の肩を強く噛んだ。

痛くはない。

ただ、彼女の快楽が限界まで高まっているのが、その小さな歯立てから伝わってくる。

「……はあ……、ん……。……先生……。……これ……。……なんだか、自分でも変なんだ……。……ここを、もつと……。……赤ちゃんみたいに、吸ってほしい……。……そうしたら、この苦しさが……。治まるような気がして……。……」

アズサは潤んだ瞳で懇願するように俺を見つめ、自らその豊かな胸を俺の口元へと差し出した。

大きな胸を両手で持ち上げ、こぼれんばかりの先端を、俺の唇の前に差し出す。その仕草はあまりに無防備で、そして官能的だった。

「……んっ、あ……。……あ……。……はあ……。……っ！」

俺がその先端を深く口に含み、吸い上げると、アズサの全身が激しく跳ねた。

彼女は俺の頭を自分の胸に強く押し付け、指を俺の髪に絡ませて、乱暴に、情熱的に掻き回す。

「……ふあっ、ああああっ！……。……ちゅ、ぶ……。……っ。……すごい、吸われてる……。……っ。……」

あ、ん、はあっ……！ ……先生……、先生え……っ！ ……もつと、……もつと強く、……全部、飲んで……っ」

ジュルリ、と激しい吸引音が湯気に響く。

授乳を模したその背徳的な行為に、アズサの理性は完全に崩壊していた。

彼女の大きな胸は、吸い上げられるたびにプルプルと震え、彼女の身体からはこれまで聞いたこともないような、淫らな喘ぎが零れ続ける。

「……はあ、はあ、はあっ……！ ……あ、だめ、……そんなに……、奥まで……っ。……んぎいいっ、ああっ……！」

彼女の身体は熱湯に浸かっているかのように熱く、その肌は赤く火照りきっている。

何度も、何度も、俺を求めするように腰を揺らし、お湯を激しく波立たせるアズサ。

混浴の静寂は、今や彼女の甘く、狂おしい悲鳴によって支配されていた。

「……先生。……もう、我慢……できない。……もつと、……もつと近くで……。……ここ

じゃなくて、……二人だけの……ベッドで……」

アズサは俺の首筋に顔を埋め、熱い息を吹きかけながら、か細い声で囁いた。
彼女の瞳には、抗いがたい熱い欲望が宿っている。

俺は彼女を抱きかかえるようにして、ゆっくりとお湯から立ち上がった。
濡れた彼女の身体が夜風に触れ、小さな震えを伝える。

これから向かうのは、禁断の領域。

彼女のすべてを暴き、甘く、激しく、互いを求め合うための場所。

俺たちは、湯気の中に消えていく自制心を置き去りにし、ベッドルームへと歩みを進めた。

第三章…静寂を切り裂く、甘美な軍事作戦



温泉の熱気を帯びたまま、俺たちは離れの客室へと戻ってきた。

部屋にはすでに二組の布団が並べられ、行灯の柔らかな光が畳を淡く照らしている。先ほどまでの湯気の中での情事の余韻が、互いの肌をじりじりと焼くように熱い。

「……ふう。……はあ……っ。……先生。……部屋に戻っても、まだ……身体の火照りが引かないんだ。……さっき、あんなに……熱くされたから……」

アズサは乱れた浴衣の裾を合わせようともせず、布団の上に力なく座り込んだ。

はだけた胸元からは、お湯でふやけた桃色の先端が、まだ興奮に震えるように顔を覗かせている。

彼女の大きな胸は、呼吸を繰り返すたびに大きく波打ち、その重みで浴衣がはらりと肩から滑り落ちた。

「……あ。……ふふっ。……もう、隠す必要なんて……ないな。……見てほしい。……先生に触れられたところが、こんなに……赤くなっている」



アズサは潤んだ瞳を俺に向け、自らの白い指先でその豊かな双丘をなぞった。

その仕草は、戦場での冷静な彼女からは想像もできないほど、淫らで、誘惑的だった。

「……先生。……あの、……次は、私が……。……先生のことを、もっと……。……知りたい。……その、……。『これ』についても……」

アズサの視線が、俺の股間の膨らみに注がれる。

彼女は少しだけ緊張したように唾を飲み込み、膝立ちのまま俺に近づいてきた。

震える手で俺の着衣を解き、露わになった欲望を目の当たりにして、アズサは小さく息を呑んだ。

「……大きい、な。……熱いし、……。ドクドクしてる。……。状況を確認。……。これは、全力で『制圧』しなければならぬ対象……。……ということか？」

少しだけ軍人氣質な言い回しを混ぜながら、彼女は俺のそれを、おずおずと両手で包み込んだ。

白く小さな手が、俺の熱を真っ向から受け止める。

「……………んっ。……………はあ、……………すごい。……………握っているだけで、……………私の手まで、熱くなってくる。……………こうして、上下に……………動かせばいいのか？」

アズサは真剣な表情で、俺のそれを上下にしごき始めた。

最初はぎこちなかった動きも、俺が漏らす吐息を聞いたたびに、次第に熱を帯びて滑らかになっていく。

彼女の指が、俺の先端を何度もなぞり、溢れ出した先走りの液を塗り広げていく。

「……………あ、……………先生。……………声、……………漏れてる。……………気持ちいい……………のか？……………なら、もつと……………」

アズサは顔を近づけ、俺のそれをじっと見つめながら、さらなる「作戦」を考案しているようだった。

彼女は不意に、自分の浴衣を完全に脱ぎ捨てた。



露わになったのは、驚くほど豊満で、しなやかな裸身。
特に、その圧倒的なボリユームを誇る胸が、重力に従ってゆらりと揺れる。

「……先生。……これ、……やってみたかったんだ。……さっき、……ハナコが言っていたのを……思い出して。……挟む、……んだよね？」

アズサは俺のそれを、自分の大きな胸の間に潜り込ませた。
むにゆり、と。

この世の贅を尽くしたような、極上の柔らかさが俺を包み込む。
彼女は両腕で自分の胸を強く寄せ、俺のそれを押し潰すようにして、身体を上下に揺らし始めた。

「……んうっ！ ……はあ、……はあ……っ！ ……すごい、……挟まって……抜けない……。……熱いのが、……胸の間に……じかに伝わってくる……っ。……あ、ん……っ、先生え……っ！」



パチパチ、と肌が擦れる音が、静かな部屋に響き渡る。

彼女の大きな胸に挟まれ、押し出されるたびに、俺の理性が削り取られていく。

アズサは快楽に顔を歪ませながら、俺の肩に額を押し当て、熱い吐息を俺の肌に吹きかけた。

「…………ふあ…………っ、あ…………っ！…………これ、…………胸が…………変な感じになる…………っ。…………先
が…………、擦れて…………っ。…………んんうっ！…………はあ、はあ…………、先生…………、…………もっど、…………
中まで…………っ」

彼女の豊かな乳房が、俺の動きに合わせてブルブルと波打つ。

アズサはその快感に耐えきれず、今度は俺のそれを、熱い口内へと誘った。

「…………はあ、…………ん、…………ちゅ…………。…………れる…………っ、ん、…………じゅ…………っ、…………ぶはっ…………」

小さな口をいっぱい✿に開け、俺の先端を深く、喉の奥まで吸い込む。

アズサは俺の顔を見上げながら、懸命に、そして情熱的に奉仕を続けた。

彼女の舌が、俺の筋をなぞり、裏側を丹念に舐め上げる。
唾液が溢れ、彼女の口元を濡らし、胸元へと一筋のラインを描いて滴り落ちる。

「……………んう……………ん、……………ちゆる……………。……………はあ、……………はあ……………っ。……………先生の……………、……………味、……………する。……………熱くて、……………少しだけ、苦い。……………でも、……………もつと欲しくなる……………不思議な味……………」

アズサは再び俺のそれを口に含み、今度は激しく、真空状態で吸い上げた。

じゅる、じゅるり、と。

部屋の中に、あまりに淫らかな音が反響する。

彼女の喉が大きく上下し、俺の欲望をまるごと飲み込もうとするかのように、何度も、何度も……………度も……………。

「……………はあ、……………はあ、……………んっ！……………あ、……………くる……………、くるんだな？……………先生……………っ！」

アズサは察したように、俺のそれを強く握りしめ、同時に口をさらに大きく開けた。

彼女の瞳には、一切の迷いはない。
ただ、俺のすべてを受け入れたいという、純粹で、狂おしいほどの愛情だけがそこにあった。

「…………つ、ん、…………んううつ!!」

熱い奔流が、彼女の口内へと解き放たれる。

アズサは目を大きく見開き、喉を鳴らしながら、それを一滴も漏らすまいと懸命に飲み込んでいく。

「…………ごくつ、…………ん、…………ごくん…………つ。…………ふはあ…………つ、はあ、はあ…………」

すべてを飲み干した後、アズサはとろりとした表情で、俺に向かって舌を突き出した。

そこには、まだ飲み込みきれなかった俺の痕跡が、白く光っている。

「…………全部、…………飲んだ。…………任務、完了…………だな。…………先生。…………ふふつ。…………なんだ

か、……お腹の奥が……あつたかい。……先生で、……満たされてる……」

アズサは俺の胸に力なく倒れ込み、幸せそうに目を細めた。

彼女の肌は、先ほどよりもさらに赤く染まり、甘い吐息からは俺自身の匂いが立ち上っている。

「……でも、……まだ……。……終わらせたく、ない。……もっと、……先生と……繋がっていたいんだ。……ねえ、……いいだろう？」

アズサは俺の腰を脚で挟み込み、熱い秘部を俺に押し当てた。

そこは、温泉のせいだけではない、彼女自身の情欲によって、すでにぐっしょりと濡れそぼっていた。

夜はまだ、中盤に差し掛かったばかり。

俺たちの「作戦」は、さらに深く、激しい最終段階へと突入しようとしていた。



第四章…融解する防衛線、白亜の熱帯夜

一度の絶頂を迎えたはずの俺の熱は、アズサの放つ圧倒的な熱量と、その甘い香りに当てられ、休むことなく再び硬度を増し始めていた。

仰向けに倒れ込んだ俺の上に馬乗りになるような体勢で、アズサは豊満な双丘で俺のそれを再び深く挟み込む。

「…………ふふっ。……先生、すごいな。……さつき、あんなにたくさん出したのに……また、こんなに……熱くて、硬くなってる」

とろけるような笑みを浮かべ、アズサは自分の両胸をぎゅっと中央に寄せた。

温泉の熱気と、互いの汗、そして先ほどの情事の名残が極上の潤滑油となり、彼女の柔らかな肉が俺の熱を滑らかに、そして力強くしごき上げる。

「…………んっ、あ…………っ。……はあ、はあ…………っ！ ……これ…………胸の奥まで…………先生の脈

打つのが……伝わってくる……っ」

彼女が腰を上下に揺らすたび、その巨大な質量を持った胸が形を変え、俺の先端を激しく擦り上げる。

ぶるん、ぶるん、と。

視界を埋め尽くすほどの白い肌の波打ちと、先端の柔らかな突起が俺の腹部に触れる感が、理性を容赦なく焼き尽くしていく。

「……はあっ、……先生っ……、先生え……っ！ ……私の胸、……気持ちいい……？ ……もっど、……もっど激しくして、いい……？」

問いかげながらも、彼女の動きはすでに止まらない。

前傾姿勢になり、俺の顔に吐息がかかるほどの至近距離で、アズサは一心不乱に胸を擦り合わせる。

乱れた銀髪の間から覗く瞳は、完全に発情したメスのそれだった。



「……………あ、ああっ！……………だめ、……………そんなにビクビクされたら……………っ、私も、胸の先が……………擦れて……………おかしくなっちゃう……………っ！……………んんうっ！」

俺の荒い呼吸に合わせて、アズサの吐息もさらに熱を帯びていく。

限界が近いことを察したのか、彼女は胸の締め付けをさらに強くし、先端を重点的にこすり上げ始めた。

「……………先生、……………先生っ！……………出して……………っ、私のここに……………っ、いっぱい、して……………っ！」

その甘い懇願が引き金となり、俺は彼女の白く豊かな谷間に向かって、熱い白濁を勢いよく解き放った。

「……………んああっ！……………はあ、はあ、はあ……………っ！……………熱いつ、……………先生の……………すっごく熱いのが……………胸に……………っ」

びゆるっ、と飛び散ったそれは、彼女の豊かな双丘を汚し、白い肌の上をゆっくりと伝い



落ちていく。

アズサは肩で息をしながら、自らの胸元を飾る俺の熱を見つめ、陶醉したような笑みを浮かべた。

「……………えへへ……………先生で、……………いっばいに汚されちゃった。……………でも……………」

彼女は胸元に落ちた白濁を指ですくい取ると、自らの舌でペロリと舐め取った。

そして、潤んだ瞳で俺を真っ直ぐに見つめ直す。

「……………まだ、……………足りない。……………胸だけじゃ、……………全然、足りないんだ。……………先生」

アズサはゆっくりと腰を浮かせ、俺の股間から離れた。

そして、俺の足の間に自らの膝を割り込ませ、ぼっかりと開いた無防備な秘所を、俺の熱源へとゆっくり押し当てていく。

そこはすでに、彼女自身の溢れ出す愛液でぐっしょりと濡れそぼり、いつでも受け入れる準備ができていることを雄弁に物語っていた。



「……先生。……私、……もう我慢できない。……全部、欲しい。……先生の全部で、私の中を……めちゃくちゃにして……っ」

震える手で俺の肩を掴み、アズサはゆっくりと腰を沈めていく。

熱く、狭い粘膜が、俺の先端をきつく締め付けながら飲み込み始めた。

「……っ！ ……あ……っ、あああっ！ ……はいってる、……先生が、……私の中に……っ！」

完全に結合した瞬間、アズサは雷に打たれたように背筋を反らし、甲高い悲鳴のような喘ぎ声を上げた。

彼女の大きな胸が天を突くように跳ね上がり、内部の強烈な締め付けが俺の理性を一瞬で吹き飛ばす。

「……すごい、……これ……っ、胸が……頭が……真っ白になる……っ。……防衛線、……」

完全に……突破された……っ。……はあっ、ああっ！」

俺が腰を動かし始めると、アズサは俺の首にしがみつき、乱れた声を上げながら必死に食らいついてきた。

パンツ、パンツ、と、肌と肌が激しくぶつかり合う水音が、静かな夜の部屋に響き渡る。

「……んああっ！ ……あ、あ、あああっ！ ……先生っ、先生えっ！ ……奥っ、……奥が、擦れて……っ！ ……おかしく、……おかしくなるうっ！」

突き上げるたびに、彼女の豊かな胸がぐわんぐわんと激しく揺れ、その柔らかな感触が俺の胸板に何度も打ち付けられる。

戦場での凛々しい姿など、もうどこにもない。

ただ快楽の波に翻弄され、愛する人に身を委ねて喘ぐ、一人の少女の姿だけがそこにあった。

「……ひいっ、……はあっ！ ……先生、……好き、……大好き……っ！ ……もっど、……

もっと強くっ、……壊れちゃうくらい、奥まで……っ！」

彼女の言葉に煽られ、俺はさらに深く、激しく腰を打ち付ける。

アズサの内部はうねるように脈打ち、俺の熱を逃がすまいと、ひくひくと執拗に絡みついてくる。

「……ああっ！ ……くるっ、……先生、私、……いくっ！ ……頭、真っ白に、なるうっ……っ！」

アズサの身体が大きくビクンと跳ね、内部の肉壁が狂ったように俺を締め上げた。

彼女の絶頂の波が俺にもダイレクトに伝わり、限界がすぐそこまで迫り上がってくる。

「……先生っ、……先生も、出して……っ！ ……あ、でも、……待って……っ」

俺がそのまま彼女の奥深くで果てようとした瞬間、アズサは不意に俺の胸を押し返し、すっぱりと抜け出した。



そして、荒い息を吐きながら仰向けに倒れ込み、俺を見上げて懇願するように口を開いた。

「……顔に、……して。……先生の熱いの、……顔で、受け止めたい……っ」

完全に溶けきった、甘く、だらしない表情。

その言葉に俺の限界もついに振り切れ、彼女の美しい顔に向けて、熱い欲望をありったけ解き放った。

「……んっ！ ……あ……っ、はあ……っ！」

びゅっ、びゅるるっ！

白い飛沫が、アズサの頬を、鼻筋を、そして微かに開いた唇を容赦なく汚していく。

彼女は目をぎゅっつと瞑りながらも、逃げることなくそのすべてを真正面から受け止めた。熱い体液が彼女の顔をドロドロに染め上げ、銀色の髪にまで絡みつく。



「……………はあ、……………はあ……………つ。……………ん……………、ちゅ……………つ」

すべてを出し尽くし、荒い息を繰り返す俺の前で、アズサはゆっくりと目を開けた。

顔射され、白濁にまみれたその顔は、とてつもなく淫靡で、それでいて、信じられないほど美しかった。

彼女は唇の端に垂れてきたそれを舌で掬い取ると、とろけるような、極上の笑顔を浮かべた。

「……………えへへ。……………あつたかい。……………先生の全部……………私だけのもの、だな。……………ふあ……………つ、……………すごく、……………気持ち、よかった……………」

その言葉を最後に、心地よい疲労感に包まれたのか、アズサは俺の胸にすり寄りるようにして、ゆっくりと瞳を閉じた。

部屋には、二人の甘く熱い吐息だけが、静かに、静かに溶け込んでいった。



第五章…限界突破の果て、溶け合う二つの熱

白濁にまみれた頬を赤く染め、俺の胸の中でスースーと規則正しい寝息を立て始めたアズサ。

だが、その安らかな時間は長くは続かなかった。

ティッシュで彼女の顔や髪を優しく拭い、乱れたシーツを整えようと身体を動かした微かな振動で、アズサは薄く目を開けた。

「……………ん、……………はあ……………。……………先生、……………どこに、行くんか……………？」

とろんと潤んだ瞳。

まだ完全に快楽の余韻から抜け出せていないのか、その声はひどく甘く、舌足らずだった。

「どこにも行かないよ。ただ、ちよつと綺麗にしようと思って」

「……………だめ。……………離れないで。……………まだ、……………足りないんだ……………」

アズサは俺の腕をきゅっと掴み、すり寄るように身体を密着させてきた。

先ほどの激しい情事の熱が、彼女の滑らかな肌から直に伝わってくる。

汗ばんだ身体が触れ合うたび、甘く淫靡な匂いが鼻腔をくすぐり、一度は沈静化したはずの俺の奥底に、再びチリチリとした熱い火種が生まれ始めた。

「……アズサ？ でも、さっきあんなに……」

「……さっきのは、……顔と、胸だけだった。……私の中は、まだ……空っぽのままだ」

アズサはゆっくりと身体を起こすと、自ら俺の上に跨った。

行灯の淡い光の中、彼女の豊満な双丘が重力に逆らえず、ぶるんと豊かに揺れる。

彼女は自分の秘所に指を這わせると、トロトロに溢れ出した自らの愛液を掬い取り、俺の熱を再び帯び始めた先端に、ゆっくりと塗りたくった。

「……はあ、……んっ。……先生の、……また、大きくなってる。……私のこと、……まだ、欲しいって……そう言ってくれてるみたいだ」

「……アズサが、こんなに可愛いからだろ。我慢なんて、できるわけない」

「……っ！ ……あ、……ずるいぞ、先生。……そんなこと言われたら、……もつと、おかしくなっちゃうじゃないか……っ」

顔を真っ赤にして、アズサは俺のそれに自らの柔らかな割れ目を押し当てた。

ぬちやり、と。

水気を帯びた卑猥な音が、静まり返った部屋に響く。

彼女は俺の肩に両手をつき、熱い吐息を漏らしながら、ゆっくりと、しかし確実に、俺のすべてをその奥底へと飲み込み始めた。

「……んんっ！ ……あ、……ああっ！ ……はいって、くる……っ。……先生の、すっごく熱くて、太いのが……私の一番奥を、押し広げて……っ！」

「……っ、アズサ、すごい締め付けた……っ。……奥の方、熱くて、どくどくしてる……」

「……はあっ、はあっ！ ……だっつて、……先生が入ってくるのが、嬉しくて……っ！ ……身体の内が、勝手に……ぎゅっつて、しちゃうんだ……っ！」



根元まで完全に密着した瞬間、アズサは大きくのけぞり、甘い悲鳴を上げた。

彼女の内部は、信じられないほどの高熱と、吸い付くような肉の贅で俺を強烈に締め上げている。

俺は彼女の細い腰を両手で掴み、下から突き上げるように腰を動かし始めた。

「……………あ、ああっ！……………ああっ！……………だめ、……………いきなり、そんな奥まで……………っ！……………んああっ！」

「……………はあ、……………ごめん、アズサのなかが気持ちよすぎて……………っ。……………止まらない……………っ」
「……………謝らないで……………っ。……………もっど、……………もっど激しくして……………っ！……………先生の全部で、私の中、めちやくちやにして……………っ！」

アズサの懇願に応えるように、俺は理性のタガを外し、獣のように腰を打ち付けた。

パンッ！　パンッ！　と、肌と肌が激しくぶつかり合う音が連和する。

そのたびに、アズサの巨大な胸が空中でぐわんぐわんと乱高下し、彼女の口からはとめどなく甘い喘ぎ声がこぼれ落ちた。



「……ひいっ！ ……あ、あ、あああっ！ ……すごいっ、……奥、ドンドンって、当たってるうっ！ ……先生、先生えっ！」

「……はあっ、アズサっ……！ ……中、すごく、締まってる……っ！」

「……んんっ、あああっ！ ……擦れるっ、……中の、弱いところ、……いっぱい擦れて……っ！ ……頭、おかしくなるうっ！」

アズサは俺の首にしがみつき、乱れた銀髪を振り乱しながら絶叫に近い喘ぎを繰り返す。

彼女の汗ばんだ肌が俺の肌に吸い付き、二人の体温が完全に溶け合っていく。
まるで、境界線が消失し、一つの生き物になってしまったかのような錯覚。

「……あ、……先生、……私、また……っ！ ……くるっ、……熱いの、弾けちゃう……っ！」

アズサの内部が、狂ったように痙攣を始めた。

肉壁が波打ち、俺の熱を搾り取るようにギユウギユウと締め付けてくる。

その圧倒的な快感に、俺もついに限界を迎えた。



「……アズサ、……俺も、いくつ……！……中、出すぞ……っ！」

「……っ！……うんっ！……出してっ、……先生の熱いの、……私の一番奥に、……全部、ちょうだいっ……！！！」

俺たちは同時に身体を強張らせ、互いを強く、骨が軋むほどに抱きしめ合った。

「……あ、あ、あああっ！！！」

「……っっっ！！！」

アズサの甲高い絶頂の叫びと共に、俺は彼女の最奥、子宮の入り口に、堰を切ったように熱い白濁を叩き込んだ。

ドクン、ドクンと脈打つたびに、濃密な精液が彼女の奥深くに注ぎ込まれていく。

アズサは目を限界まで見開き、口をバクバクとさせながら、全身をガクガクと震わせてそのすべてを受け止めた。

「……ああっ、……はあっ、……あ、あ……っ。……熱いっ、……お腹の奥が、……先生の

熱で、いっぱいになってる……っ」

「……はあ、……はあ……っ。……アズサ……っ」

すべてを放出し終えても、俺たちは繋がったまま、荒い息を繰り返した。

アズサの内部は、まだ絶頂の余韻でひくひくと脈打ち、注ぎ込まれた俺の熱をこぼすま
いと優しく包み込んでいる。

俺は力なく倒れ込んできたアズサを抱きとめ、汗ばんだ彼女の背中をゆっくりと撫でた。

「……はあ、……ふう……っ。……先生。……心臓の音、すごい……」

「……アズサもだろ。……すごく早くて、大きい」

重なり合った胸から、互いの激しい鼓動が伝わってくる。

トクン、トクンと、まるで二つの心拍が同期していくようだ。

「……ふふっ。……先生」

「……ん？」



「……すごく、気持ちよかった。……今まで生きてきた中で、一番……。……頭の中が真っ白になって、……。ただ、先生のことだけしか考えられなくなった……。」

アズサは俺の胸に頬をすり寄せ、とろけるような甘い声で囁いた。

普段の彼女からは想像もつかない、どこまでも無防備で、女としての喜びに満ちた表情。

「……俺もだよ。アズサの中、すっごく熱くて、気持ちよかった。……。アズサの全部が、愛おしくてたまらない」

「……っ！ ……あはは、……。なんだか、照れるな。……。でも、嬉しい。……。先生にそう言ってもらえるのが、何よりの報酬だ」

彼女は少しだけ身体をずらし、俺を見上げて最高の笑顔を見せた。

繋がった部分から、入りきらなかった二人の愛の証が、ツーツと一筋、シートへとこぼれ落ちていく。

その淫らな感触にすら、今はただ深い幸福感しか感じなかった。



「……先生。……私、もう……戦場になんて、戻りたくないかもしれないな。……ずっと、こうして……先生の腕の中にいたい」

「……ずっと、いれたい。俺が、アズサのことずっと守るから」

「……うん。……約束だぞ。……私、……先生のこと……大好きだから」

アズサは俺の唇に、触れるだけの優しいキスを落とした。

窓の外では、夜の闇が少しずつ白み始め、新しい一日の始まりを告げようとしていた。

硝煙の匂いも、過酷な作戦もない。ただ、互いの温もりと、分かち合った極上の快樂だけが、この部屋を満たしている。

俺たちはどちらからともなく再び唇を重ね、溶け合うような甘い余韻の中で、静かに目を閉じた。

エピローグ…日常に溶け出す、甘い硝煙の残り香



「……状況を確認。……周囲、異常なし。……よし、先生、潜入成功だ。……ふふっ」

トリニティ総合学園、放課後の誰もいない部室。

アズサは慣れた手つきで扉の鍵を閉めると、いつものタクティカルベストを脱ぎ捨て、俺の隣にすくと腰を下ろした。

温泉旅行から数日。補習授業部の仲間たち……ヒフミやハナコ、コハルには「少し顔色が良くなったわね」なんて冷やかされているようだが、彼女自身はいたって真面目な顔で、だがその瞳には隠しきれない熱を宿して俺を見つめてくる。

「……あ、……あの。……ハナコが言っていたんだ。『温泉の後は、事後のケアが重要ですよ』って。……だから、その……。……報告書を書く前に、……。補給、……。してくれないか？」

アズサは上目遣いで俺の袖を掴むと、そのまま俺の膝の間に割り込むようにして膝をついた。

制服のスカートを大胆に捲り上げ、彼女は俺のベルトに指をかける。

その手つきは、あの夜を経て、驚くほど積極的で、それについてひどく淫靡なものへと変

わっていた。

「……………ん、……………はあ……………。……………あ、……………熱い。……………ズボンの上からでも、……………先生の……………こんなにな硬くなってるのが、わかる」

アズサは期待に震える吐息を漏らしながら、俺のそれを露わにした。

放課後の教室という背徳感が、彼女の興奮をさらに煽っているのか。

彼女はためらうことなく、熱を帯びた俺の欲望を、その小さな口内へと導いた。

「……………ん、……………ちゅ……………っ、……………じゅる、……………れろ……………っ、……………んう……………」

温かく、湿った口腔の快楽。

アズサは俺の顔を見上げ、潤んだ瞳でこちらを射抜くように見つめながら、懸命に舌を動かす。

ズボンの隙間から溢れ出す唾液の音が、静かな部屋に生々しく響き渡る。彼女の喉が上下するたび、俺の理性が削り取られていく。

「…………ぶはっ、…………はあ、はあ…………っ。…………先生。…………次は、…………これ…………っ。…………ハナコが、『アズサちゃんの最大の武器を使いなさい』って…………」

アズサはブラウスのボタンを素早い手つきで弾き飛ばした。

中から現れたのは、あの夜、俺を狂わせた圧倒的な質量を持つ双丘。

彼女は両腕でその豊かな肉を左右から挟み込み、俺のそれを深い谷間へと埋没させた。

「…………んうっ！…………あ、…………ああっ！…………すごい、…………挟まってる…………っ。…………先生
の、…………ドクドクしてるのが、…………胸の先まで、じかに…………っ！…………んんうっ！」

むにゅり、むにゅりと、この世のものとは思えない柔らかさが俺を包み込む。

アズサは顔を真っ赤にし、俺の肩を強く握りしめながら、必死に胸を上下に揺らした。

豊かな乳房が、俺の動きに合わせてブルブルと波打ち、先端の柔らかな突起が俺の腹部を執拗に撫で上げる。

「……あ、ああっ！……先生っ、先生えっ！……胸が、……胸の奥が、……熱くて、おかしくなっちゃうっ！……はあっ、……んああっ！」

アズサの甘い喘ぎ声が、夕暮れの部室に溶けていく。

彼女は限界が近いことを察したのか、腰を浮かせ、俺の腰に脚を回してしがみついていた。

「……もう、……待てない……っ。……先生、……私の中に、……早く……っ！」

俺は彼女を抱き上げ、部室の机の上に仰向けに寝かせた。

散らばる教科書やノートを押し除け、彼女の濡れそぼった秘所へと、俺の熱を一点に集中させて突き立てる。

「……っっ！……あ、ああああっ！……はいった、……先生が、……奥まで……っ！」

結合した瞬間、アズサは背中を弓なりに反らし、甲高い悲鳴のような喘ぎを上げた。

狭い内部が、俺の侵入を歓迎するようにギュウギュウと締め付け、熱い粘膜が絡みついてくる。

「……はあ、はあっ！ ……すごいっ、……先生っ！ ……温泉の時より、……もっと、……もっと熱い……っ！ ……あ、あ、あああっ！」

俺は彼女の豊かな胸を揉みしながら、激しく腰を打ち付けた。

ガタガタと机が揺れる音が、彼女の喘ぎ声をさらに激しくさせる。

アズサは俺の背中に爪を立て、乱れた声を上げながら、俺のすべてを飲み込もうと必死に腰を揺すり上げた。

「……ひいつ、……あ、ああっ！ ……そこ、……そこおっ！ ……先生っ、……奥の、変なところ……いっばい擦れてるうっ！ ……ひ、んああっ！」

突き上げるたびに、彼女の大きな胸が弾むように揺れ、俺の視界を支配する。アズサは快樂の絶頂に達し、白目を剥きながらガクガクと身体を震わせた。

その強烈な締め付けに、俺もついに限界を迎える。

「…………アズサ、…………いくっ！ ……中、いっぱいにするぞ…………っ！」

「…………うんっ！ ……いいよ、…………出してっ！ ……先生の熱いの、…………私の中に、全部、ぶちまけてえっっ！！」

俺は彼女の奥深く、一番熱い場所に向けて、熱い奔流を解き放った。

「…………んああっ！！ ……あ、あ、あ、あああああっ！！」

ドクン、ドクンと、俺の脈動が彼女の最奥を打つ。

アズサは口を大きく開け、音にならない悲鳴を上げながら、俺の熱をまるごと飲み干していく。

内部の肉壁が狂ったように俺を締め上げ、二人の快楽が完全に一つに混ざり合った。

「…………はあ、…………はあ、…………はあ…………っ。…………ん…………、…………先生…………っ」

静寂が戻った部屋で、俺たちは互いの体温を確かめ合うように強く抱き合った。

アズサの肌は汗でしっとり濡れ、彼女の吐息からは俺の匂いが立ち上っている。

「…………ふふ。…………先生。…………やっぱり、…………気持ちいいな。…………温泉の時も、…………今日も…………先生と繋がると、…………私、…………本当に幸せなんだ」

「…………俺もだよ、アズサ。…………アズサの全部が、俺を幸せにしてくれる」

アズサは俺の胸に顔を埋め、幸せそうに目を細めた。

繋がった場所から、入りきらなかった俺の熱が、彼女の太ももを伝って一筋流れていく。それすらも、彼女にとっては誇らしい勲章のように見えた。

「…………さて。…………状況を再確認。…………任務、大成功だ。…………ふふっ。…………先生、…………大好きだぞ。…………これからも、…………ずっと」

アズサは俺の唇に、深く、甘い誓いのキスを刻んだ。



学園という日常の中に、二人だけの秘密の熱。
俺たちの物語は、これからも、この熱い鼓動と共に続いていく。

く
完
く

